地方都市における育児期女性のパーソナル・ネットワーク

前　田　尚　子

The Personal Networks of Women during the Childrearing Stage in a Local City

Naoko Maeda

Summary

In this paper, the structures and functions of personal networks of women during the childrearing stage are explored, using survey data collected in a local city. Findings are as follows:

1. The parents of respondents and their husbands live close by.
2. Non-kin associates who are on good terms with respondents also tend to live close by, i.e., various kinds of friends acquired across the life stages accumulate near their place of residence and form multistory support networks.
3. The relations with these non-kin associates have distinctive attributes and provide distinctive kinds of support according to the contexts of how they got to know each other.

Based on these findings, problems of childrearing networks of mothers in a local community can be identified.

key words : Personal Network; Childrearing; Local City.

1．問題設定

出生率の低下、母親の育児不安、児童虐待などが社会問題となるなかで、子育て支援が国の政策課題となっている。1994年に策定された「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）では、子育て中の親の孤立感や不安感を軽減するために地域の子育てネットワークづくりを打ち出している。このような政策をうけて、自治体レベルでは、児童福祉施設、保健・医療、教育などの関係機関の相互連携の強化や、子育て相談窓口の充実とともに、地域の母親をつなぐ育児ネットワークづくりが進められている。

このような施策の土台となるべき研究上の蓄積に目を転ずると、育児期女性のパーソナル・ネットワーク研究の場合、親族ネットワークとそのサポート機能については実証研究の蓄積があるが[1]、非親族ネットワークとそのサポート機能についてはいまだ十分なデータの蓄積があるとはいえない。とくに、この分野における実証研究の多くは、大都市およびその近郊をフィールドとして行われており[2]、地方都市や郡部の実態については十分に明らかにされていない。しかし、移動性の高い大都市部と移動性が低い地方都市および郡部とでは、育児期女性のもつ親族資源および非親族資源に、少なからぬ違いがあると推測される[3]。いうまでもなく、地域の育児支援策は、各地域の実情を踏まえたうえで企画されるべきである。本稿では、地方都市における実態解明のための予備的作業として、岐阜市およびその近郊の幼稚園児の母親を対象として、育児期女性の非親族ネットワークの構造と機能を探索することにしたい。

これまでの研究をふりかえると、親族に焦点がおかれていたため、非親族を詳細に分類して分析を加えることはあまり行われてこなかった。しかし、非親族といってもさまざまである。たとえば、子どもを持つ以前からつき会っている学校時代の友人と、子どもを持ってから知り合った近所の母親仲間とは、おそらくまったく異なる役割を果たしているはずである。そこで、本稿では、非親族との関係を、知り合ったきっかけによって細かく分類し、交際年数、接触頻度などの関係特性および機能特性（サポート）との関連を明らかにすることを目的としている。

以下では、岐阜市内と岐阜市近郊の２つの幼稚園に通う子どもの母親365人からのアンケート調査データをもとに、(1)親族資源の状況を明らかにし、(2)親しいつきあいをしている非親族について、知り合ったきっかけ別に、交際年数、家までの所要時間、接触頻度を分析する。さらに、(3)知り合ったきっかけ別に、どのようなサポートが動員可能であるかを検討する。

２．データと変数

２．１　データ

岐阜市内と岐阜市近郊の２つの幼稚園に通う子どもの母親約600人を対象とし、園を通じて母親に調査票を配布し、園を通じて回収した。調査期間は平成14年９月10日から17日である。そのうち365人から回答があった（回収率61％）。うち、白票１を除いた364を分析対象とする。回答者の基本的属性は表１のようである。年齢は30歳代が８割を占める。移動性の低い地方都市の特徴として、地元（美濃地方）出身者が７割を超えている。学歴は高校卒が42.9％、短大卒以上が36.1％となっている。44.3％が仕事をしており、その雇用形態は、パート・アルバイトが半数近くを占め、正規雇用のものは２割である。また、住居形態は持ち家一戸建てが圧倒的に多い。

表１　回答者の基本的属性（%）　　カッコ内は実数

年齢	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40歳-	合計
	0.6	10.5	46.0	33.6	9.4	100（364）

出身地	生まれてからずっと現在の住所に住んでいる	美濃地方（岐阜市を含む）	美濃地方以外の岐阜県	愛知・三重県内	その他	合計
	8.5	68.3	6.1	8.0	9.1	100（363）

婚姻状態	現在結婚している	離別・死別した	合計
	98.3	1.7	100（363）

学歴	中学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	合計
	3.6	42.9	17.4	26.6	9.5	100（357）

仕事の有無	仕事をしている	仕事をしていない	合計
	44.3	55.7	100（357）

雇用形態	事業主・経営者	家族従業員	正規雇用の会社員・公務員	派遣・契約社員	パート・アルバイト	内職	合計
	3.2	17.2	21.0	2.5	49.7	6.4	100（157）

住居形態	持ち家一戸建て	分譲マンション	一戸建て借家	民間賃貸マンション	公営賃貸住宅	民間アパート	その他	合計
	76.5	1.4	0.8	5.6	2.0	11.5	2.21	100（357）

年間世帯収入	300万円未満	300万～500万円未満	500万～700万円未満	700万～900万円未満	900万円以上	合計
	6.3	34.0	31.7	16.0	12.0	100（350）

２．２　変数

調査対象者に、家族・親族以外で、親しいつきあいをしている人を、親しい順に４人まで思い浮かべてもらい、それぞれについて、知り合ったきっかけ、交際年数、家までの所要時間、接触頻度について尋ねた。知り合ったきっかけは、「学校が同じ」「職場・仕事をとおして」「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」「趣味・習い事をとおして」「近所に住んでいる（住んでいた）」「その他」のなかからあてはまるものを一つだけ選んでもらった。このうち、「近所に住んでいる（住んでいた）」ものとの交際年数を調べると、おもに10年未満に集中しているが、そのほかに20年以上にわたるものも多いという二峰性を示していた。そこで、「近所に住んでいる（住んでいた）」ものを、子どもができる前からつき会っているものと、子どもができた後につきあい始めたものに下位分割し、前者を「近所に住んでいる（住んでいた）」とし、後者を「子どもを通じた地域のつきあいをとおして」とした。

さらに、最大４人まで挙げられた親しい関係のそれぞれについて、つぎの９つのサポート項目についてどのくらい頼りになるかをたずね、「とても頼りになる」「やや頼りになる」「あまり頼りにならない」「全く頼りにならない」の４件法で答えてもらった。９つのサポート項目は、育児に関するサポートかそれとも育児以外に関するサポートかという軸と、サポートの内容の軸（情緒的サポート、相談的サポート、実体的サポート、交流）を組み合わせて以下のように作成した。

表２　サポートの分類

	情緒的サポート	相談的サポート	実体的サポート	交流
育児に関するサポート	・子育てについての悩みや愚痴を聞いてくれる	・子育てについて心配なことが起きたとき、助言やアドバイスをしてくれる	・急な用事が起きたときに、気軽に子どもの世話を頼める	・親子で集まったり、出かけたりして、楽しく時をすごせる
育児以外に関するサポート	・仕事についての悩み事や愚痴を聞いてくれる（有職者のみ） ・夫婦関係や親族関係についての悩み事や愚痴を聞いてくれる	・あなたのこれからの生き方について助言やアドバイスをしてくれる	・とても忙しいときに、仕事や家事をてつだってくれる	・あなた自信の趣味について話し合ったり、一緒に趣味を楽しんだりできる

なお、分析には、回答者個人のデータ・ファイル（N=364。以下では個人単位データ・ファイルと呼ぶ）と、回答者が挙げた最大４人までの親しい非親族との関係を単位とするデータ・ファイル（N=1164。以下では関係単位データ・ファイルと呼ぶ）の２つのファイルを用いる。

３．結　　果

３．１　親の家までの所要時間

地方都市の育児期女性の場合、大都市と比べて移動性が低いため、親族が比較的近くに住んでおり、重要な援助資源となっていることはこれまでにも指摘されている（安河内 2001）。このサンプルにおいても、夫の親と自分の親が近くに住んでいるものが圧倒的多数を占める。回答者のうち、夫の両親が30分未満の場所（同居を含む）に住んでいるものは７割にのぼる。自分の両親についても、30分未満（同居を含む）が６割近くにのぼり、２時間以上のものは１割にすぎない。

表3　自分の両親と夫の両親の居住地（%）

カッコ内は実数

	自分の両親居住地	夫の両親居住地
同居（同じ建物内）	8.8	24.6
となり・同じ敷地内	2.8	7.0
30分未満のところ	46.3	39.2
30分以上1時間未満のところ	19.3	12.9
1時間以上2時間未満のところ	9.4	4.5
2時間以上のところ	10.7	8.7
両親とも他界	2.8	3.1
合計	100（363）	100（357）

（個人単位データ・ファイルを使用）

3．2　親しいつきあいをしている非親族の数

前項では、本調査の回答者は親族資源に恵まれていることを確認してきたが、非親族についてはどうであろうか。まず、親しいつきあいをしている非親族の数をみてみよう。表4のように、4人から6人であるものが最も多く、4人以上を挙げたものを累計すると全体の7割に迫る。

一方、親しいつきあいをしている非親族はいないと答えたものも8.6%含まれている。本調査では、すべての回答者に対して「もっと友人がほしいと思いますか」とたずねている。その回答をみると、表5のように、親しいつきあいをしている非親族は「いない」と答えたものは、他よりも「もっと友人がほしい」と考えているとはいえない。したがって、これらのものは、親しい友人ができず孤立感を味わっているとはいいがたい。むしろ、「子育て仲間とのつきあいがエスカレートしてわずらわしくなってやめた」「誰も信用できないが、仲間はずれにされるのが嫌でつき合っている」などといった自由記述から推測すると、子どもを通じた母親同士の関係の難しさから、あえて親しいつきあいを避けている可能性もある。あるいは、頻繁に接触している非親族はいるが、「親しいつきあいをしている」という教示内容には適合しないと考え、あえて「いない」と答えたものが含まれている可能性がある。これは、「孤立育児」とは別の問題の存在を示唆している。

表4　親しいつきあいをしている非親族の数（%）

カッコ内は実数

1人	2人	3人	4～6人	7～9人	10人以上	いない	合計
3.6	7.5	11.6	44.9	11.1	12.7	8.6	100（361）

（個人単位データ・ファイルを使用）

表5　親しいつきあいをしている非親族数別にみた「もっと友人がほしいと思うか」(%)

カッコ内は実数

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	合　計
1人	53.8	23.1	15.4	0.0	7.7	100 (13)
2人	39.1	34.8	21.7	0.0	4.3	100 (23)
3人	44.7	28.9	10.5	7.9	7.9	100 (38)
4～6人	30.4	26.1	21.1	10.6	11.8	100 (161)
7～9人	20.0	35.0	27.5	10.0	7.5	100 (40)
10人以上	32.6	23.9	23.9	6.5	13.0	100 (46)
いない	41.9	19.4	22.6	6.5	9.7	100 (31)
合計	33.5	27.0	21.0	8.2	10.2	100 (352)

$\chi^2=18.8$　N.S.（個人単位データ・ファイル使用）

3．3　知り合ったきっかけ

これらの親しいつきあいをしている非親族は、どのようなきっかけで知り合ったのであろうか。回答者が挙げた最大4人までの合計1164人のうち無回答を除く1158人について、知り合ったきっかけを示したものが表6である。もっとも多いのは「学校が同じ」で30.8%、続いて、「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」23.5%、「子どもを通じた地域のつきあいをとおして」20.6%と続き、以下「職場・仕事を通して」が14.2%、「その他」5.9%、「近くに住んでいる（住んでいた)」4.3%、もっとも少ないのは「趣味･習い事を通して」2.3%となっている。「その他」の自由記入をみると、家族（おもに夫）を通じて知り合ったもの、友人の友人などが含まれる。また、少数であるが、インターネットやメールを通じて知り合ったものも含まれていた。

表6　知り合ったきっかけ（%）

カッコ内は実数

学校が同じ	職場・仕事をとおして	子どもの幼稚園･学校･習い事が同じ	趣味・習い事をとおして	子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	近所に住んでいる（住んでいた）	その他	合計
30.8	14.2	23.5	2.3	20.6	4.3	4.2	100 (1158)

（関係単位データ・ファイルを使用）

さらに知り合ったきっかけを、親しい順に（すなわち回答者が名前を挙げた順に）比べたものが表7である。「学校が同じ」は比較的高い順位で名前が挙げられることが多いが、「趣

味・習い事をとおして」と「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」は低い順位で挙げられる傾向がみられる。

表7　親しい順序と知り合ったきっかけ（%）　カッコ内は実数

	学校が同じ	職場・仕事をとおして	子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	趣味・習い事をとおして	子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	近所に住んでいる（住んでいた）	その他	合計
1番目	34.5	+17.7	19.8	1.5	19.2	4.9	2.4	100 (328)
2番目	32.2	12.4	23.6	2.2	22.0	3.2	4.5	100 (314)
3番目	32.0	12.8	23.8	1.8	19.6	5.0	5.0	100 (281)
4番目	−22.6	13.2	28.1	+4.3	22.1	4.3	5.5	100 (235)
合計	30.8	14.2	23.5	2.3	20.6	4.3	4.2	100 (1158)

x^2=26.3　p<0.1　セル内の符号は残差分析の結果　＋／−　p<0.05

（関係単位データ・ファイルを使用）

3．4　交際年数

親しいつきあいをしている非親族との交際年数をみると、表8のように、4年以下がもっとも多く、37.1%を占めている。その一方で、交際期間が15年以上の長きにわたるものも3割以上含まれている。つきあいが始まったのは子どもができる前か後かで分類すると、表9のように、ほぼ半数にわかれる。

表8　交際年数（%）

カッコ内は実数

−4年	5−9	10−14	15−19	20−24	25−29	30−34	35年−	合計
37.1	19.0	12.5	15.9	10.1	3.2	2.0	0.2	100 (1163)

（関係単位データ・ファイルを使用）

表9　つきあいは子どもができる前か後か（%）

カッコ内は実数

子どもができる前からのつきあい	49.2
子どもができた後からのつきあい	50.8
合計	100 (1159)

（関係単位データ・ファイルを使用）

交際年数の長さは、出会ったきっかけによって異なる。表10のように、相対的にみて交際期間が長いのは「学校が同じ」で、10年から24年にわたるものが多い。それに続くのが「職

場・仕事をとおして」で、5年から19年にわたっている。一方、交際年数が短いのは、「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」であり、4年以下が74.2%を占める。「子どもを通じた地域の活動をとおして」も4年以下が64.9%を占める。また、実数は少ないものの、「近所に住んでいる（住んでいた）」には交際年数が20年以上にわたるものが4割近く含まれている。これらは、回答者のおさななじみであると考えられる。

表10　出会ったきっかけ別にみた交際年数（%）　カッコ内は実数

	−4	5−9	10−14	15−19	20−24	25−29	30−34	35年−	合計
学校が同じ	−2.0	−3.6	+17.1	+37.0	+26.9	+9.2	+3.9	0.3	100（357）
職場・仕事をとおして	−17.1	21.3	+29.9	+25.6	6.1				100（164）
子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	+74.2	22.5	−1.8	−0.4	−1.1				100（271）
趣味・習い事をとおして	+55.6	22.2	7.4	11.1		3.7			100（27）
子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	+64.9	+31.4	−2.9	−0.4	−0.4				100（239）
近所に住んでいる（住んでいた）	−14.0	+32.0	14.0	−4.0	10.0	6.0	+18.0	+2.0	100（50）
その他	29.2	31.3	27.1	6.3	6.3				100（48）
合計	36.9	+19.1	+12.5	15.9	10.2	3.2	2.0	0.2	100（1156）

（関係単位データ・ファイルを使用）

$x^2=973.3$　$p<0.01$　　セル内の符号は残差分析の結果　＋／−　$p<0.05$

3．5　家までの所要時間

つぎに、これらの親しいつきあいをしている非親族の家までの所要時間をみてみよう。表11のように、全般的に、回答者の居住地近傍に住んでいるものが多い。所要時間が15分未満が半数にものぼり、30分未満を加えると7割を超える。

表11　家までの所要時間（%）　カッコ内は実数

15分未満	15分〜30分未満	30分〜1時間未満	1時間〜2時間未満	2時間以上	合計
50.5	22.2	13.8	6.7	6.8	100（1164）

（個人単位データ・ファイルを使用）

家までの所要時間を知り合ったきっかけ別に比べると（表12)、きっかけによって所要時間は異なっていることがわかる。「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」「子どもを通じた地域でのつきあいをとおして」「近所に住んでいる（住んでいた)」は15分未満に集中しているが、「学校が同じ」「職場・仕事をとおして」はそれらよりもやや長くなっている。とはいえ、もっとも所要時間が長い「学校が同じ」の場合でも、所要時間１時間未満までを累計すると半数を超えており、「職場・仕事をとおして」では30分未満までの累計で６割を超える。

表12　知り合ったきっかけ別にみた家までの所要時間（%）

カッコ内は実数

	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上	合計
学校が同じ	−19.9	+27.5	+27.0	+13.5	+12.1	100（356）
職場・仕事をとおして	−22.6	+39.6	+18.9	+10.4	8.5	100（164）
子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	+81.3	−15.8	−1.1	−0.4	−1.5	100（272）
趣味・習い事をとおして	40.7	18.5	22.2	3.7	14.8	100（27）
子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	+64.1	−6.7	−5.0	−1.7	−2.5	100（239）
近所に住んでいる（住んでいた）	+64.0	18.0	10.0	2.0	6.0	100（50）
その他	−20.8	+41.7	14.6	12.5	10.4	100（48）
合計	50.4	22.1	13.8	6.7	6.8	100（1156）

（関係単位データ・ファイルを使用）

$x^2=461.4$　$p<0.01$　　セル内の符号は残差分析の結果　＋／－　$p<0.05$

３．６　接触頻度

直接接触･電話接触の頻度については、ともに、月１回程度が最も多くなっている（表13)。接触頻度を知り合ったきっかけ別にみると（表14)、相対的にみて、もっとも頻繁に会っているのは「子どもを通じた地域のつきあいをとおして」「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」「近所に住んでいる（住んでいた)」であり、少なくとも週１回以上会っているものがいずれも過半数を占める。反対に、会う頻度が少ないのは、「学校が同じ」であり、少なくとも週に１回以上会っているものは１割に満たない。そのほかに「職場・仕事をとおして」も会

表13　対面接触頻度・電話／メール頻度（%）

カッコ内は実数

	ほぼ毎日	週１回以上	月１回以上	年４回以上	年１回以上	会わなかった	合計
対面接触頻度	11.3	21.2	30.4	21.7	13.0	2.6	100（1163）
電話・メール頻度	5.6	28.4	40.7	14.2	4.1	7.0	100（1162）

（関係単位データ・ファイルを使用）

表14　知り合ったきっかけ別にみた対面接触頻度（%）

カッコ内は実数

	ほぼ毎日	週１回以上	月１回以上	年４回以上	年１回以上	会わなかった	合計
学校が同じ	−0.6	−5.1	−25.6	+38.5	+25.3	+5.1	100（356）
職場・仕事をとおして	12.3	−9.2	27.0	+31.3	16.0	4.3	100（163）
子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	11.8	+38.2	+38.6	−9.2	−2.2	− 0	100（272）
趣味・習い事をとおして		14.8	+55.6	7.4	18.5	3.7	100（27）
子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	+27.2	+33.5	28.0	−6.7	−3.3	1.3	100（239）
近所に住んでいる（住んでいた）	+24.0	30.0	26.0	−8.0	12.0	0.0	100（50）
その他	−0.0	14.6	33.3	29.2	20.8	2.1	100（48）
合計	11.3	21.0	30.4	21.6	13,1	2.6	100（1155）

（関係単位データ・ファイルを使用）

$x^2 = 447.3$　$p<0.01$　セル内の符号は残差分析の結果　＋／−　$p<0.05$

う頻度が少ない。

電話・メールなどの間接的な接触頻度については、やや異なる傾向がみられる（表15）。少なくとも週１回以上電話やメールで連絡をとっている割合をみると、もっとも多いのはやはり「子どもを通じた地域の活動をとおして」と「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」であるが、「学校が同じ」も２割を超えている。「学校が同じ」は、直接会う機会は少ないものの、電話やメールなどによる接触は比較的頻繁に行われているようである。一方で、「子どもを通じた地域の活動をとおして」「近所に住んでいる（住んでいた）」では、直接接触が頻繁であり、電話やメールのやり取りをする必要もないためか、「なし」も多くなっている。

表15　知り合ったきっかけ別にみた電話・メール頻度（%）　カッコ内は実数

	ほぼ毎日	週1回以上	月1回以上	年4回以上	年1回以上	なし	合計
学校が同じ	−2.8	−19.4	+48.3	+20.5	+7.0	−2.0	100（356）
職場・仕事をとおして	4.9	25.9	44.4	14.8	4.3	5.6	100（162）
子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	5.9	+40.8	39.3	−8.5	−1.8	−3.7	100（272）
趣味・習い事をとおして	+18.5	−11.1	51.9	11.1	3,7	3.7	100（27）
子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	+8.4	+35.6	−29.7	−9.2	−1.3	+15.9	100（239）
近所に住んでいる（住んでいた）	8.0	18.0	36.0	8.0	+10.0	+20.0	100（50）
その他	2.1	20.8	33.3	+29.2	4.2	10.4	100（48）
合計	5.5	28.5	40.7	14.1	4,2	6.9	100（1154）

（関係単位データ・ファイルを使用）

$x^2=175.8$　$p<0.01$　セル内の符号は残差分析の結果　＋／−　$p<0.05$

3．7　サポート

さて、これらの親しいつきあいをしている人々は、回答者にどのようなサポートを提供しているのであろうか。9つのサポート項目のそれぞれについて、回答者がどのくらい頼りになると考えているかを示したものが下の表16である。サポートの内容によって回答分布は大きく異なっている。育児に関する情緒的サポートである「子育てについての悩みや愚痴をきいてくれる」、相談的サポートである「子育てで心配なことが起きたとき、助言やアドバイスをしてくれる」、交流である「親子で集まったり、出かけたりして、楽しく時を過ごせる」および育児以外に関する情緒的サポートである「夫婦関係や親族関係についての悩みや愚痴をきいてくれる」「仕事についての悩み事や愚痴をきいてくれる」についてはかなり頼りになると答えているが、実体的サポートについては、育児に関するものであれ（「急な用事ができたときなどに、気軽に子どもの世話を頼める」）、それ以外のものであれ（「とても忙しいときに、仕事や家事を手伝ってくれる」）、あまり頼りにされていないようである。おそらく、これらの実体的サポートは、親族が担っているものと推測される。

続いて、知り合ったきっかけとサポートの関係を調べてみよう。表17は、知り合ったきっかけ別にみた、回答者が各サポート項目について「とても頼りになる」と「やや頼りになる」と答えた関係の占める比率である。知り合ったきっかけによって、提供するサポートは異なっていることが分かる。「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」と「子どもを通じた地域の活動をとおして」は、「子育てについての悩みや愚痴をきいてくれる」「子育てで心配なことが起きたとき、助言やアドバイスをしてくれる」「急な用事ができたときなどに、気軽に子どもの世話を頼める」「親子で集まったり、出かけたりして、楽しく時を過ごせる」など育児

表16 親しいつきあいをしている非親族からのサポート（%）

カッコ内は実数

	とても頼りになる	やや頼りになる	あまり頼りにならない	全く頼りにならない	合計
子育てについての悩みや愚痴を聞いてくれる	52.4	39.5	6.9	1.3	100（1153）
子育てで心配なことが起きたとき、助言やアドバイスをしてくれる	46.4	39.4	11.8	2.4	100（1154）
急な用事ができたときなどに、気軽に子どもの世話を頼める	16.9	24.1	27.9	31.1	100（1127）
親子で集まったり、出かけたりして、楽しく時を過ごせる	50.6	29.2	11.8	8.3	100（1142）
仕事についての悩み事や愚痴を聞いてくれる	44.6	37.4	12.9	5.1	100（479）
夫婦関係や親族関係についての悩みや愚痴を聞いてくれる	49.6	35.6	12.1	2.7	100（1142）
これからの生き方について助言やアドバイスをしてくれる	35.0	38.0	22.4	4.6	100（1142）
とても忙しいときに、仕事や家事を手伝ってくれる	8.9	16.6	31.4	43.2	100（1116）
あなた自信の趣味について話し合ったり、一緒に趣味を楽しんだりできる	34.0	31.7	24.4	9.9	100（1139）

（関係単位データ・ファイルを使用）

に関するあらゆるサポートについて非常に頼りになる。一方、「学校が同じ」をみると、子育てについてのサポートは「子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ」「子どもを通じた地域の活動をとおして」などには及ばないが、「夫婦関係や親族関係についての悩みや愚痴をきいてくれる」「これからの生き方について助言やアドバイスをしてくれる」のように、母親役割とは離れた回答者個人の抱える問題に対してはもっとも頼りになる相手となっている。そのほか「職場・仕事をとおして」は「仕事についての悩み事や愚痴をきいてくれる」についてとくに頼りにされている。すなわち、これらの親しいつきあいをしている非親族たちは、それぞれ相補的な役割を果たしている様子がうかがわれる。

4．考　察

以上の分析結果をまとめ、その含意を考察することにしたい。

(1) 本サンプルの育児期女性は、親族のみならず、非親族資源にも恵まれている。幼なじ

表17　知り合ったきっかけとサポート（%）

サポート／きっかけ	子育てについての悩みや愚痴を聞いてくれる **	子育てで心配なことが起きたとき、助言やアドバイスをしてくれる **	急な用事ができたときなどに、気軽に子どもの世話を頼める **	親子で集まったり、出かけたりして、楽しく時を過ごせる **	仕事についての悩み事や愚痴を聞いてくれる **	夫婦関係や親族関係についての悩みや愚痴を聞いてくれる **	これからの生き方について助言やアドバイスをしてくれる **	とても忙しいときに、仕事や家事を手伝ってくれる +	趣味について話し合ったり、一緒に趣味を楽しんだりできる
学校が同じ	90.2	−82.0	−22.9	−75.9	85.8	+91.8	82.5	−19.3	69.1
職場・仕事をとおして	88.9	83.3	−31.4	−70.3	+91.3	88.8	78.1	26.3	62.7
子どもの幼稚園・学校・習い事が同じ	94.7	+89.5	+55.7	+84.7	−72.8	−76.5	−65	+30.2	66.5
趣味・習い事をとおして	−70.4	−66.7	25.9	66.7	60	77.8	70.4	29.6	77.8
子どもを通じた地域でのつきあいをとおして	+95	+90.8	+57.2	+86.6	75.6	−79.9	−63.1	28.4	−59.5
近所に住んでいる（住んでいた）	91.7	85.4	54.2	81.3	80	91.8	+81.3	21.3	68.8
その他	95.8	87.5	31.9	85.4	94.7	95.8	70.8	27.7	70.8
実数	1145	1146	1119	1134	468	1141	1134	1108	1131

（関係単位データ・ファイルを使用）

表頭の記号は x^2 検定の結果 +p<0.1　*p<0.05　**p<0.01

セル内の符号は残差分析の結果　＋／－　p<0.05

み、学校時代の友人、職場での友人、子どもを通じた友人など、ライフステージごとに形成してきたさまざまな友人関係が、居住地近傍に累積し、重層的なネットワークを形成している。これは、移動性の低い地方都市における育児期女性のパーソナル・ネットワーク構造の典型を示していると考えられる（野邊・田中 1994）。

(2) これらのパーソナル・ネットワークの成員との関係は、知り合ったきっかけによって、異なる特性を示し、異なるサポートを提供している。たとえば、学校時代の友人は、やや遠くに住んでおり、あまり会う機会はないけれども、10年以上のつきあいがあり、回答者にとって親密度が高い関係と位置付けられている。そして、母親役割とは離れた回答者個人のニーズを充足するようなサポートを提供する。一方、幼稚園や近所の公園や育児サークルなどで子どもを通じて知り合った母親仲間は、回答者の居住地近傍に住んでおり、頻繁な接触をもとに、子育てに関するさまざまなサポートを提供している。しかし、そのつきあいはせいぜい数年程度で、回答者によってとくに親密度の高い関係として位置付けられているわけではない。その他、仕事を通じた友人や趣味を通じて知り合った友人もそれぞれ特有の関係構造をもち特有の役割を果たしている。つまり、これらの親しいつきあいをしている非親族たちは、それぞれ相補的な役割を果たしており、これらが組み合わされることによって、回答者のもつさまざまな生活ニーズが充足されていると考えられる。

以上の知見は、地域の母親たちのネットワークづくりを促進しようとする支援策の可能性とともに限界を示唆するものである。

第1に、地域の母親たちによって構成される育児ネットワークが提供できるサポートには、偏りがあるということである。育児ネットワークが提供できるサポートは、育児に関連したサポートに限定される傾向があり、母親役割から離れた個人的な問題には十分に対応できないと考えられる。育児期女性の個人としての発達を保障するためには、地域の母親ネットワークの形成のみならず、母親役割から離れた関係の維持・開発も支援すべきである。

第2に、さらに重要なことは、おそらく、地域の母親たちのネットワークづくりを促進しようとする施策は、すべての地域において同程度の有効性をもつとはいえないということである。このような施策は、移動性が高く、孤立育児状態におかれた専業主婦が集住する大都市郊外においては十分に有効であると考えられる。本サンプルのなかにも、遠くから引っ越してきたばかりで友達ができずに悩んでいたが、行政による育児サークルに参加することによって、孤独から救われたという自由記述を寄せてきたものがあった。しかし、地方都市の場合、親元から遠く離れ、友達もなく、孤立育児状態におかれているものは少数派であることをわれわれのデータは示していた。本調査の統計データおよび自由記述から浮かび上がってきたのは、孤立育児とは別の問題である。移動性が低いゆえに、親族および非親族のネットワークが居住地近傍に重層的に堆積している地方都市では、むしろネットワークの緊密さがもたらす息苦しさが問題になっている可能性がある。われわれは、この点を検証するために、パーソナル・ネットワークの緊密さを示す指標であるネットワーク密度[4]と精神的負担との関連を分析する予定である。

いうまでもなく、育児支援策は、地域の実情をふまえたうえで企画されるべきである。それぞれの地域特性と、そこで展開される育児期女性および男性のパーソナル・ネットワーク

の特性を明らかにし、その地域特有の問題構造を把握した上で、支援策を講ずるべきである。そのためには、より代表性の高いサンプルによる、信頼できるデータの蓄積が急務である。

注

1）たとえば、落合（1989)、安河内（2001）など。

2）久保（2001）は、東京都に住む働く母親の親族ネットワークおよび非親族ネットワークの機能について検討している。

3）安河内（2001）は、都市度による親族資源の違いを実証している。

4）ネットワーク密度については、松田（2001）を参照されたい。

文　献

久保圭子、2001「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」日本家政学会『日本家政学誌』52:135-145.

松田茂樹、2001「育児ネットワークの構造と母親の well-being」日本社会学会『社会学評論』52（1）:33-49.

野邊政雄・田中宏二、1994「地方都市における既婚女性の社会的ネットワークの構造」社会心理学会『社会心理学研究』10（3）: 217-227.

落合恵美子、1989「育児援助と育児ネットワーク」落合恵美子著『近代家族とフェミニズム』勁草書房。

安河内恵子、2001「都市化における女性の就業と社会的ネットワーク」金子勇・森岡清志『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房。

付　記

本研究は、岐阜聖徳学園大学短期大学部子育て研究会の活動の一環として行われた。

アンケート調査にご協力くださった幼稚園の教職員の皆様と園児のお母様方に心よりお礼を申し上げます。